



渋谷の街中で追求する 農業の可能性

ビルが林立する渋谷区をフィールドとして、自分たちで食べる野菜を自分たちで作ろう、というプロジェクトが始まっています。都市農業の新たな可能性を追求するNPO法人「アーバン・ファーマーズ・クラブ」代表理事の小倉 崇さんに伺いました。

自分で育てて、野菜の価値を実感

「渋谷の畑」と銘打ち、ビルの屋上など渋谷区内の4カ所に田畑を設け、米や野菜を栽培するプロジェクトが進行しています。運営するNPO法人「アーバン・ファーマーズ・クラブ」の代表理事の小倉さんは「毎年一定以上の収量を確保しなければならない専業農家と異なり、試行錯誤ができるので、自由な発想を生かせるおもしろさがあります。メンバーのスキルを磨くということでは、いわば『大人の部活』です」と言います。



小倉 崇さん。出版社勤務を経て、編集者として独立。出版・広告の仕事の傍ら、農業に目覚め、全国の農家取材。2014年に「ウィークエンドファーマーズ」を設立。2018年にNPO法人「アーバン・ファーマーズ・クラブ」を設立し、代表理事に。

プロジェクトに参加するメンバーが続々と現れ、現在300人を超えています。「神奈川県農家にも仲間がいて、種をもらったり、堆肥作りの名人から土を譲り受けたり、協力してもらっています」と言う小倉さん。「自分たちで作ることで、農作物の価値が分かりますから、生産者の気持ちに思いをはせるようになり、ただ安さだけを求めるのではなく、良い農産物に正当な対価を払う動機にもつながるはずです」

冬はカブやニンジン、夏はトマトやトウモロコシ、秋は大豆やレタスなど、渋谷の畑では、さまざまな作物が育っています。

「部活」とはいえ、生産も順調になり、都内のレストランなどへの出荷も計画しています。また、渋谷駅近く、再開発の進む川沿いではオーガニックコットンの栽培も始めており、ゆくゆくは渋谷産コットンを利用した事業を、と新たな展開も視野に入れています。

小倉さんたちのプロジェクトに、東急電鉄(株)や東急不動産(株)、(株)伊藤園、キューピー(株)、サッポロ不動産開発(株)など渋谷区に本社を置く会社が賛同し、協力してくるようになっていきます。



一緒に活動する仲間たちと。メンバーにはカメラマンやデザイナーなどのクリエイターも多い。



渋谷川沿いの遊歩道に設置したコンパクトな畑「渋谷リバーストリートファーム」。



近隣の保育園の園児たちが植えた稲が育つ。収穫期には「おにぎりパーティ」を計画。

段階的に深まる農業の楽しさ

フリーランスで出版・広告の仕事をしていた小倉さんが農業の魅力に気づいたきっかけは、山形県の米農家の暮らしを1年かけて取材したことでした。「『人間が手を抜かず、誠心誠意尽くせば、苗も田んぼも応えてくれる』。そんな関係性にひかれ、週末に神奈川県の実に通うようになり、やがて実に通う仲間が増え、さまざまな人と知り合うことになりました」

2015年には仲間のついでで渋谷のライブハウスの屋上を借りられることに。6トンの土を人力で担ぎ上げ、3つの木製のコンテナに入れて、葉野菜やニンジンなどを育て始めました（現在は移転）。

「都市と農業は意外と相性が良いところがあると気づきました。例えば植栽の樹木の落ち葉やカフェから出るコーヒー豆の搾りかすなど、堆肥の材料も豊富なんです」

都心に出現した屋上の実には毎日のように見学者が訪れ、野菜や農業の魅力を伝えようと収穫祭などのイベントを開催すると数百人が集まります。「都市生活者も本能的に土に触れたい、作物を育てたいのだろうと実感します」と小倉さん。

「汗をかく。土に触れる気持ち良さを味わうなど五感がフル稼働する。スキルが向上する。風通しの良いコミュニティができる。農業の楽しさは多様で、段階的に深まります。ペットボトルを輪切りにして土を入れただけで小さな実になります。ぜひ豊穡な世界への第一歩を踏み出してください」



実のあるビルに入居するIT企業の社員3人が昼休みに訪れて種まきを体験した。



東急プラザ表参道原宿にある「おもはらの森」で開催したイベント「おもはらやさいの森マルシェ」。野菜市や自分で摘んだ葉野菜でサンドイッチを作る催しなどを行った。



▶ アーバン・ファーマーズ・クラブ